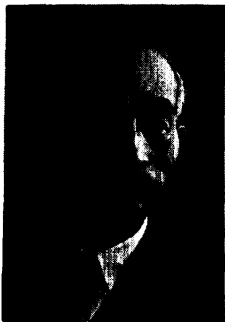


学会活動に想う*

会長 山内二郎**



学会の活動には、いろいろな面があるが、何れにしても、その学会が担うべき分野の内容を豊かにし、それによって社会に貢献するものでなければならぬ。ことに国際的協同活動のわが国における代表的な学会としての任務があるからには、国内活動への寄与とともに国際的活動への寄与を

も合わせて生み出さなければならぬ。

情報処理学会がこうした二つの任務を持つということ、あらためて想起しておく必要がある。学会が生れてまだ数年という新しい学会で、まだ学会として十分な成長を遂げていないにもかかわらず、この分野はまことに著しい速さで進展して行く過程にあり、創立当時考えられていた内容とは、おそらくは著しく異ったものに発展しているものがある、そのためのいろいろなひずみに悩まされているのであろう。

国内活動への寄与だけを考えて済むのであれば、学会の成長に応ずるような活動にかぎっておれば、それなりの成長を遂げて行くであろう。しかしこの学会が二つの国際的協同活動への寄与をもその任務としているからには、それぞれの任務をも果して行くための努力も怠ってはならぬ。一つには国内の関連産業に重大な影響のある規格制定のための調査研究であり、二つには将来非常な発達を来すにちがいない学会本来の学術分野の国際的水準向上への研究調査である。この何れを取って見ても、なかなか大きな内容を持っており、しかも将来の情勢に大きな影響のあるものであるから、目の前だけの問題としてだけでなく、本腰を入れて取り組まなければならない問題である。この認識が案外に浅いのではないと思われる。一般産業界の不況時である現時点で、この認識の浅いことがままたま表われて来ていることは、学会の将来にとって、まことに悲しむべきことである。

情報処理は、単に情報処理にとどまらないで、それ

* On the Activities of the Information Processing Society of Japan, by Ziro Yamauti (President of the IPS., and Professor of Keio University, Faculty of Engineering)

** 慶応義塾大学工学部

はさらに総合管理につながる広い内容を持っている。そして、いま思いつくだけでも、いろいろな方面に関係して将来の社会活動の健全な基盤としての応用、利用の分野をあげることができよう。したがって関連学問分野としても、まことに広い拡がりを持っているので、会員の構成も徐々にではあろうが、拡がって行くにちがいない。学会は現時点での問題を取り上げるのはもとよりのことではあるが、さらに近い将来の問題、さらに遠い将来の問題をも考えて、それへの発展の途だけは通しておかなければならぬであろう。

こうして国内活動の力が盛りあがってこそ、国際的協同活動へも実力がおよんで行くものと信ずるのである。そうでなければ、空いばりに終るに過ぎない。

国内活動の力を盛りあげるということの一つの大きな原動力は、何と云っても、この活動のための人の層の厚さである。すなわち将来の利用者の数をふやすことである。ここに教育問題が浮びあがってくる。

かねてからの問題としているのではあるが、電子計算機を使うことが、そろばんを使うことのように気軽に考えられるような、そのような人を育てる教育の問題である。今まで教育といえば、何かプログラマ教育のような声が強かった。それはその必要性が強く感ぜられたからであるが、実はそのようないわば専門家養成の目当ては、専門教育をする機関でも自然に取り上げられるもので、現にそうした教育はすでに行なわれていることはここにいうまでもない。それぞれの大学で、それぞれの考えによってこの教育が行なわれている内容について、とやかくいうべき段階でもない。

しかしここで、とくに問題としたいことは、もっと広い意味のことである。さきにも述べたように、そう遠くない将来、情報処理とそれによる総合管理ということの普及ということを考えてみれば、一般に電子計算機に親しみを持つということを目指して、少なくとも大学の教養課程で、いわゆる理工系以外の学生をも対象として基礎教育をしておくことである。もし可能ならば高等学校でも基礎教育をしておくことである。

それには、われわれが現在持っている知識を活かして、そのためのカリキュラムをつくって、標準的なものを示し、実施希望の処から、おいおいに実施に移して行くということから始めたらと思っている。

学会の本来あるべき姿から考えて、学会将来のために、会員諸氏の協力を切に願う次第である。